



中央区朝堂院の調査

平城第367次調査

2004. 3. 27



奈良時代後半の平城宮と調査区的位置

中央区朝堂院とは

中央区朝堂院は、第一次大極殿院の南に附属して設けられた施設で、天皇の御位式や毎年の元日朝儀のほか、外国使節に対する宴會にも用いられた儀式空間です。

740年(天平12)の藤原遷都に伴って大極殿が藤原宮に移築され、745年(天平17)の平城遷都後に東区に新たに大極殿(第二次大極殿)が建設された後、第一次大極殿の跡地は西宮と呼ばれる宮殿で建て替えられたと考えられていますが、中央区朝堂院はそのまま奈良時代まで使われました。

第367次調査について

今回の調査は中央区朝堂院朝庭および下ツ道など下層遺構の実態の解明を目的としています。中央区朝堂院朝庭部分の本格的な調査としてははじめてのものとなります。2004年1月から開始し、3月27日現在調査中、面積は約1900㎡です。

調査の成果として注目されるのは、4棟の孤立柱建物を確認したことです。いずれも東西棟で中央区朝堂院の中軸線を基準に配置されているようです。朝庭部分は基本的には建物が建てられず、広場として用いられていたと考えられますので、この建物群は特殊な目的のために建てられ、短期間使用されていたものと考えることができそうです。平城宮の中でも重要な施設である朝堂院の利用の実態を考える上で貴重な情報をもたらすものと見られます。

また、奈良時代の聖地土の下からは平城宮造営以前に使用された下ツ道の東西両側溝を確認することができました。遷都以前の周辺土地利用のありかたをうかがうことができます。



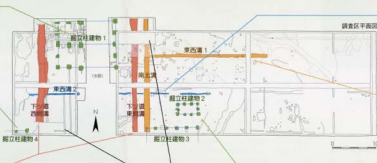
下ツ道西側溝(北より)

孤立柱建物1

水路によって未確認の柱穴がありますが、3間×4間の東西棟建物と考えます。柱間隔は12.7m(9尺)、現状で13.5m×10.8mの大型の建物で、建物の中央を中央区朝堂院の中軸線に合わせていることを特徴にあげることができます。なお、調査区北側の未調査範囲に広がる可能性もあります。

孤立柱建物4

調査区の南西隅にあり、柱穴2基のみの確認で詳細は不明ですが、中央区朝堂院の中軸線と向きを反する孤立柱建物3とは対称的位置にあり、同様の建物となる可能性が高いと考えます。



東西溝2

深さが一定でなく、水路を留めるための部分もあります。中央区朝堂院中軸線付近の溝が直切られた部分に柱穴が見つかっています。

溝は孤立柱建物2・3の北側を区画する形態、柱穴は門になる可能性もあります。

東西溝1・南北溝

溝の中には多数の小石が入っていました。性格は不詳ですが、奈良時代の一時期に朝庭部分に溝が存在していたと考えられることもできます。あるいは小石を詰められた溝として朝庭の水はけを良くする目的で設けられたものの可能性もあります。

下ツ道

平城遷都以前に築かれていた大和盆地を南北にはしる直線道路です。遷都とともに宮内部分には埋め戻され、意内は拡縮されて東宮大路となりました。近隣の平城宮第16・17次、第119次調査でも存在を確認しています。道の両側には排水溝が敷かれていて、今回は幅1.9-1.0m、深50.2mの東側溝と、幅1.5-2.0m、深50.9mの西側溝の間が道路にありました。調査区南端の道路幅は幅路心×間で22.4mです。



小石で舗装された朝庭

調査区全体に敷き詰められた小石があら、朝庭は丁家と舗装されていたことがわかります。

柱穴や溝はこの小石敷の上から掘り込まれたと想定されますが、柱穴を掘った後に小石を敷き直したため跡跡がわかりにくくなっています。そのため、今回の調査では一部を除いて記録は成後小石敷を除去しました。

孤立柱建物2・3

孤立柱建物2は3間×2間の東西棟で、柱間隔は桁行1.65m(5.5尺)、梁行1.5m(5尺)。孤立柱建物3は北側の柱列5間のみ確認しましたが、東西棟で柱間隔は2.4m(8尺)と考えられます。

この二つの建物は東側の柱列を揃えており、北や南を柱列を含むなど柱穴内の様子が見えていたことから、異時期に建てられていたと考えられます。



出土遺物について

掘立柱建物2・3の柱穴からは、奈良時代の瓦、磚が出土しています。これらのうちで最も新しい瓦は757～767年(天平宝字～天平神護年間)頃のもので、このことから、この2棟は奈良時代後半、中央区第一次大極殿院の解体以降のものとすることができます。

下ツ道西側溝では、平城遷都直前に位置づけられる木製品、土師器、須恵器が出土しています。

他に、古墳時代の土師器、奈良時代の鉄釘、古代・中世に用いられた宋銭や中世の瓦器も出土しています。



掘立柱建物2 柱穴内瓦、磚出土状況



東区朝堂院 大宮宮惣紀院(北より)

調査の意義

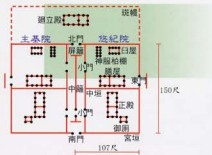
掘立柱建物、および溝の確認により、朝庭部分が広場としてばかりでなく、多様に利用されていたことが明らかになりました。

一称徳天皇の大宮宮と推定一

特に注目したいのは、今回見つかった建物群が、東区朝堂院朝庭で見つかった大宮宮の一郭とよく似た建物配置をとっていることです。東側の柱列を握えた掘立柱建物2・3の配置や区画溝は、東区朝堂院朝庭の第169次調査で見つかった大宮宮の建物群の配置とそっくりです。

また東区では明確でなかった中軸線上に位置する掘立柱建物1も見つかっています。「儀式」や「延壽式」を参考にする、今回見つかった掘立柱建物1は廻立殿、掘立柱建物2・3は悠紀院の白屋と願屋、掘立柱建物4は主基院の願屋に比定できそうです。

このように、今回の調査によって、中央区朝堂院の朝庭でも天皇の即位大嘗祭が営まれていた可能性が高いことがはじめて明らかになりました。柱穴出土の瓦や文献史料の検討から、今回見つかった建物群は、765年(天平神護1)におこなわれた称徳天皇の大嘗祭の時のものと推定することができます。



「儀式」による大宮宮の建物配置(緑の範囲が調査区)

一下ツ道最北部の様相一

平城遷都以前の遺構である下ツ道は平城京造営の基準となった道路です。本調査区はこれまで見つかった下ツ道の遺構としては最も北側にあたり、少なくとも飛鳥周辺から本調査区までは直線道路が存在していたことが確定しました。今後、山背(山城)へのルートのひとつとして想定されている歌姫越との関係を考える上で基礎となる資料になります。

調査区周辺には、未発掘の部分があり、周辺の調査の進展によってさらにその実態が明らかになるでしょう。

本調査は平城宮の中核部分の利用の実態を明らかにし、多くの新たな課題をもたらした調査と意義づけることができます。今後の調査研究に御期待ください。

中央区朝堂院の調査 平城第367次調査

2004年3月27日

独立行政法人 文化財研究所

奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

〒630-8577 奈良市二条町二丁目9-1

TEL 0742-30-6832 <http://www.nabunken.go.jp/>